



わたしの羊を飼いなさい。

三度目にイエスは言われた。「ヨハネの子シモン、わたしを愛しているか。」…「わたしの羊を飼いなさい。」

(ヨハネによる福音書 21 章 17、18 節)

主イエスが裁判を受けている最中、三度にわたり自分はイエスなど知らないと言ってイエス様を裏切った弟子ペトロの、魂の再生の話を学びます。

イエス様が復活されたあと、ペトロはひとりイエス様に会ったようです(ルカ 24:34)。ただ、その時の会話は聖書のどこにも書いてありません。ペトロはおそらく、穴があれば入りたい思いでイエス様と会って謝罪したのでしょう。…その後イエス様は、ペトロを含む弟子たち皆の前に現れて、「あなたがたに平和があるように」と言って下さいました。ペトロだけでなく弟子たち全員に、罪の赦しの言葉をかけて下さったのです。

この日、ガリラヤ湖畔に現れたイエス様は、ペトロに三度にわたって「わたしを愛しているか」と問いかけられました。その最初の言葉は、「この人たち以上にわたしを愛しているか」、これはイエス様が弟子たちに自分への愛を競わせているということではありません。あの最後の晩餐の席で、ペトロは「たとえ、みんながつまずいても、わたしはつまずきません」と言っていたのです。イエス様はそのことを念頭に、「この人たち以上にわたしを愛するか」と尋ねられました。ペトロは恥ずかしくて、もう「この人たち以上に」とは言えません。「はい、主よ。わたしがあなたを愛していることは、あなたがご存じです」とだけ答えています。

イエス様の三度にわたる問いかけは、ペトロの三度にわたる裏切りと結びついています。それはペトロにあの事件を再び思い起こさせ、心の傷に触れることになりましたが、そのことでイエス様はペトロに彼の重大な罪を見つめさせ、悔い改めさせたのです。そして、その上で新たな課題を与えられます。「わたしの

2018年5月発行

羊を飼いなさい」と。もちろんこれはたとえです。羊が羊飼いに導かれなければ生きて行けないように、人間はイエス様とイエス様が任じた羊飼いに導かれなければ霊的な命を得ることが出来ません。すなわち教会です。ペトロはその仕事をする羊飼いの一人として、主イエスに任じられたのです。

ただ、そのあとイエス様はペトロの最期について告知されます。「あなたは、若いときは、自分で帯を締めて、行きたいところへ行っていた。しかし、年をとると、両手を伸ばして、他の人に帯を締められ、行きたくないところへ連れて行かれる」。それは「ペトロがどのような死に方で、神の栄光を現すようになるかを示そうとして」言われたのです。

聖書には書いてありませんが、ペトロが殉教したのは歴史的事実です。殉教は誰にでも命じられていることではなく、イエス様の弟子たちにしても全員が殉教したわけではありません。ですから殉教に定められているわけではない普通の人間は、何があっても最後まで生き抜かなくてはなりません。そのことを踏まえた上で、この時のペトロの思いを想像してみましょう。ペトロがそんなのとんでもないとか、勘弁して下さいとか言ったでしょうか。そうではなかったのです。

ペトロと向かい合い、彼の殉教を視野に入れつつ、十字架の死に打ち勝って復活された主イエスが、三度、愛を求めておられる。ペトロの愛を新しくされる。主の問いに応えた時、ペトロはそこで初めて真実の悔改めに至ります、愛を新しくしていただきます。この時、彼もまた死に打ち勝つのです。

繰り返しますが、誰もがペトロと同じ最期をとげる必要はありませんが、ペトロは主イエスに、最後は殉教をもって信仰をまっとうすることを示された時、そこから逃げだすことなく、その道を勇気をもって歩んで行ったのです。そして最後に、イエス様と同じように十字架につけられることによって、神の栄光を現しました。これは信仰の勝利の話です。

(2018年5月6日の礼拝説教より)

牧師 井上 豊